

つぎつぎ vol.4

雁木町家のある高田をつなぐマガジン

二〇二五年三月 TAKADA GANGI FREE MAGAZINE

“たて”と“よこ”にとどまらない、新たな軸を築いていく



たてよこ書店 TATEYOKO SHOTEN 堀田滉樹さん

943-0825 新潟県上越市東本町2-1-4
tateyokosyoten214@gmail.com
facebook/Instagram/note 情報掲載
https://tateyoko-syoten.com/ 新設



■四九朝市に出店



■小冊子を出版

3年目の展開

2024年12月で、開店から満2年が経ちました(つぎつぎ vol.2 に紹介)。建物が“たて”に長く、それが“よこ”に連なって形成されている雁木通りの物理的構造と、地域の歴史や伝統などの時間軸を“たて”、地域とのつながりを“よこ”と捉えて、“たて”と“よこ”への広がりをつくろうという想いのもとにつけた「たてよこ書店」という店名。その想いを形にしようと試行錯誤を重ねてきました。

地域の本屋から、交流は広がっていく

3年目以降は“たて”と“よこ”にとどまらず、もっと「立体」として地域を捉えていくフェーズ。数学でいうところのZ軸をどう捉えるか。それは地域の事業者や住民の「思い」だと思っています。このまちへの思いは人それぞれ。所属や立場、年齢、職業などに応じて様々あることでしょう。そういった多様な想いを立体的に捉え、これまでの“たて”と“よこ”のつながりを活かし、Z軸を新たに創造していくことを3年目以降は目指します。

抽象的な話はさておき、少し具体的にお話すると、焦点を当てるのはこのまちらしさ。いわゆる地域文化です。それはもちろん雁木もそうですし、農林水産業、誓女、職人仕事、発酵、雪国の暮らしなど様々。それらに光をあて、関係する皆様とともに、このまちらしさのある暮らしをつくっていったらと思います。まちの本屋としてしっかりと地に足つきながら、これからも歩みを進めてまいります。(堀田滉樹)



高田小町を核に様々な活動や店舗が増加中。東本町は曲がっても続く雁木通りが特徴です。

雁木町家 Hot Spot

小冊子出版、朝市出店、オリジナル商品開発やPodcastと、まちなみと建物の変化よりも伝達のスピードが速い世代。雁木通りの起業、Uターン、二拠点居住など、堀田さんの活動にひかれて、県内外から大学生や若い旅行者が訪れます。



たてよこ探訪記

東 本町の雁木を歩いて、たてよこ書店に立ち寄ってみる。静かに流れるBGMの中に文庫や新書本が並ぶ。初めは少なかった本も、今では充実してきた。「どんな本があるのだろうか」と見るだけでも楽しい。Phytonの参考書を見つけて驚いた。本当にジャンルにこだわってないのだなと！「手紙の日 littera」や「タコスの日」、「珈琲」の飲食営業日もあり、人がより集まりやすい場所作りがされているし、放課後は目の前にある小学校の児童も立ち寄っていく。スマホで何でもできる時代になり、紙の本の需要は低下している。漫画でさえスマホで読めるが、「そんな中でも本屋はなくなっちゃいけない」と語る堀田さんだ。古本の存在価値が薄くなり、書店が減っていることに寂しさを抱いているようだ。自分の知らない世界を教えてくれる本に出合うきっかけをくれるのは、たてよこ書店のような場所だと思う。(高村将斗：富山大学)

卒論の取材に訪れた高村さんは上越出身



東本町は善光寺町から始まる



赤い鉄骨、細い杉柱、雁木通りは通学路



響きのよい吹抜け：もと山静堂



商家の心得：きもの小川



「たてよこの交差点 vol.1」新たな軸

お手元の冊子を別居のご家族や上越を離れたご友人等にお送りいただき雁木のまち高田の未来に想いを致す人の輪を次へ広げていただければ幸いです



つぎつぎ4号
発行日：2025年3月22日
発行者：関 由有子
発行元：一般社団法人雁木のまち再生
mail:ganginomachisaisei@gmail.com

上越市高田の市街地には「雁木のある町家」が立ち並んでいます。多雪という気候風土の中で、今も雁木のあるまちの暮らしは受け継がれています。しかし、人々は進学や就職を機に、雁木のまちを離れてきました。空き家と空き地はこれからも増えていきます。

このまちの住みよきは、地域の『助け合い』の心に支えられてきました。近年は「雁木のまちの暮らし」を引き継ぐためのさまざまな営みが実を結び始めています。

京都の町家から始まった「町家の日」の活動に、越後高田として三年目の参加となり、活動の範囲や顔ぶれは少しずつ広がってきました。途切れながらも長く連なる雁木が、この先、受け継ぐと思う人々につながることを願っています。

本号の取材と撮影にご協力いただいた多くの皆様に、心より感謝申し上げます。



2017年冬、町家カフェ Re: イエを開業した打田亮介さんは、この小さなカフェを始めに「町家複合施設 兎に角」など、多くの雁木町家リノベーションを手掛けています。

雁木付き

とある町家の

今昔つぎつぎ物語

- 上越市東本町
- 明治中期頃築

よくある空き家

町家カフェ Re: イエ

元 住居兼店舗
リノベーション

Atelier shop & Cafe
sankaku x shikaku

町まぎまな出逢いの『交差点』

町家のカフェ sankaku x shikaku にお邪魔しました。ここは雁木町家をリノベーションしたカフェ兼アトリエショップで、2022年10月にオープンしました。東京からUターンしたイラストレーターの qucecke (フセック)さんと彼女の幼馴染でキャンドルアーティストの Hitsuji Candle (ヒツジキャンドル)さんのお二人が、「色々な作家さんの作品を置ける場所をつくりたい」と思い、その気持ちが形になりました。壁の木箱と奥の部屋の壁や押入に、様々な作品を見るのができます。

これらの上越内外で活動する作家さんの絵画やアート、写真や手作りグッズなどは、店内で販売されています。作家さんが教えるワークショップもありですので、「その時その場でつくる時間」を共有できるでしょう。カフェでは、「コーヒーなどのドリンクと色々な具材の三角おむすびとみそ汁、四角いトーストとスープを楽しめます。」

■ 多様な背景を秘めてつながる

「作家さんの作品が好きなのは他の人の作品も好きになる可能性があるあって、新しい発見があるかもしれない。作家さん、カフェ、町家とか、それぞれそれぞれの入り口がある交差点のような場所を目指しています。学生さんも気軽に来てもらえれば。」(qucecke さん)

「町家は一人店主にちょうど良いサイズ。私たちやお客様と、同士の距離が近いから人間関係が作れる場になっている。人と人をつなぐ場所。それが使命なのかなと思っています。」(Hitsuji Candle さん)

「近所さんの利用も増えています。」(藤村勝之)



アトリエショップ & カフェ sankaku x shikaku



新潟県上越市東本町1-1-11
12:00 ~ 19:00(冬季18:00)
月・水 定休、他イベント出店時
@sankakushikaku



キャンドル作家 Hitsuji Candle とイラストレーター qucecke の二人のクリエイターが運営しています。どんな人でも入りやすいように「カフェ」を結ぶ目として「つる人 x つる人」、「つる人 x まちの人」、「まちの人 x まちの人」様々な人と人が行き交う交差点のような場所を目指しています。sankaku x shikaku (さんかくしかく) という名前は「X」の「おむすびとトースト」、キャンドルの炎の形とイラストのキャンパスの形から。私たち二人と周りのみんなとつながって成長していくお店です。

■ それぞれの作品は壁の木箱に並ぶ



出逢いの『交差点』

■ 和室の白い壁に青の諧調が映える



■ 川村翠さんのワークショップ アクリル絵具の作品に挑戦する



■ 左側は押入を改造した展示スペース 週末のカフェにこどもの姿も見える



ここはかつて、「Re: イエ」という町家カフェでした。東京から高田に移住してきた建築士の打田亮介さんが、DIYで古い空き町家をリノベーションしてカフェを営業していました。私にとってこの場所は、打田さんとの出逢いの場所です。「リノベーションの魅力が高田に若い人々の関わりが増えてほしい。」そんな夢を語った場所でした。さらに、Re: イエを皮切りに近年のまちの変化を見守ってきた気持ちから、この建物に『はじまりの場所』のような、特別な思いがあります。打田さんは数年後に移転。高田駅の近くに町家複合施設『兎に角』を開業し、インテリアデザイン&リビルドという古民家再生を専門とする会社を起業しました。その頃から増えてきた「雁木町家リノベーション」の中心的存在として、上越内外で活躍しています。



周りの人や小学生ともつながる Re: イエの移転後は2年ほど空き家のままでしたが sankaku x shikaku に引き継がれました。元のカフェをベースにアレンジを加えて、打田さんが施工デザインに協力しています。作家さんのワークショップや作品マーケットなどカフェだけでなく、様々な出逢いの場を広げています。取材をしていると、小学生の女子グループがやってきて、勉強しながらカフェを利用していました。聞けば時々訪れるとのこと。ちょっと前では考えられない光景に驚きつつも、とてもうれしくなりました。sankaku x shikaku は、この「まち」に通じる新しい入り口を作り出していて、今日も誰かの『はじまりの場所』になっているのかもしれないな?と感じさせる一幕でした。(藤村勝之)

緊急!

司法書士のつぶやき

不動産の「相続放棄」

雁木のまち再生 理事 岩野 秀人



不動産を相続したくないので「相続放棄」をしたいという相談が増えています。中には、子供に負担を掛けたくないで、元気なうちに対策しておきたいというマイナスの相続対策相談もあります。

法律的な意味での「相続放棄」は、原則として相続を知ってから3ヶ月以内に家庭裁判所に申立をする必要があり、預貯金は引き継ぐが不動産は引き継がないという選択はできません。また、「相続放棄」をすれば国が不動産を引き取ってくれる訳でもないので、中途半端な立場に置かれることにもなります。

歴史的には、誰でも不動産を所有することができるようになったのは、明治以降とされています。さらに、戦後の農地解放により自作農が増加し、高度経済成長期に住宅ローンで自宅を取得することが一般的になって、現在の空き家問題や不要な不動産問題が発生しています。

今後、少子高齢化と地方の過疎化がますます進むことは間違いなく、「相続放棄」された不動産が急増することは確実です。国レベルでの対応が必要です。

雁木町家の

時代

Era of Gangi Machiya,
Between Past and Future.



ゴゼミュージアム タカダ 贅女ミュージアム高田

越後高田の中心市街地を歩いてみれば、まず目に付くのは『雁木』でしょう。軒を連ねるさまざまな形の屋根と柱が連続し、上には梯子もあります。江戸時代初めの大地震以来、大雪でも安全な通り道として、各々の所有者の私有地に庇屋根をかけたのが始まりです。現在も約13kmと日本一の長さで、子どもたちの安心安全な通学路でもあります。

ミュージアムの建物である『麻屋高野』は麻織物店でした。昭和12年の建築で高田の雁木町家の典型的なつくりです。懐かしいボンネットバスも走る昭和のまちなみを、田辺周一さんが作られたジオラマをご覧ください。

新潟県上越市東本町1-2-33
TEL 025-522-3400 (小川)
土日公開10-16時、ほかに企画展あり

URL: <https://goze-museum.com/>
Instagram: gozemuseum_takada



築90年の『高野商店』
その硝子戸は重たい……

Universal & Inclusive Museum



ミュージアム ナビゲーター
渡辺 裕子
Yuko Watanabe

上越市高田出身。身近に杉本家の贅女さんが暮らしていました。そんな縁から贅女ミュージアム高田のオープンから案内役を務める渡辺さんです。贅女さんや町家暮らしを知り尽くし、丁寧な語り口で、その世界を来館者に伝え続けて10年。リピーターさんのことはよく覚えてます。

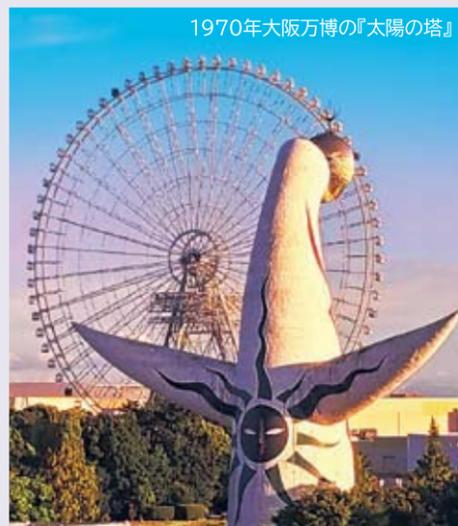
彼女は書道の達人で、銘板と館内の優雅な筆文字、絶賛公開のインスタグラムも担当。



昨年、贅女ミュージアムは大阪千里の国立民族学博物館の【世界の吟遊詩人】特別企画展に協力して、見るだけでなく「触って感じる、聞いて感じる」ユニバーサル展示の可能性を示しました。

ユニバーサルミュージアムの研究者を中心に、ツアーと研究会が高田周辺で開催されました。ミュージアムのこれからの展開を示すようです。

贅女ミュージアムでは、『浮世絵に見る贅女』を4月末から開催。江戸時代の名所絵の中で、贅女や座頭が自由に旅をする姿をご覧ください。



1970年大阪万博の『太陽の塔』

その戸を開けた瞬間、目に飛び込んでくる重厚な梁と吸い込まれるような吹抜け、宙に浮くような渡り廊下と急な階段。重い硝子戸の外からは見えない世界が広がります。ここは「贅女」と呼ばれた盲目の女芸人の生き方を伝える『贅女ミュージアム高田』です。彼女たちが生きた時代の空気を感じながら、ゆっくりお入りください。昭和初期の雁木町家には、今日では見聞きできない面白さや、人の手がかかった温もりが溢れています。その町家をご案内しましょう。

■ 斎藤真一の旅路・昭和後期
ここは、贅女と向き合い、贅女を追いかけた研究者や画家、多くの文化人たちの足跡をたどる場でもあります。その筆頭といえば画家の斎藤真一でしょう。十年余りの間、高田贅女のもとに足しげく通い詰めて、その道程は彼女たちが巡業していた北信濃の地まで延びていきました。盲目の贅女が生きたために鍛え上げた芸と仲間の厳しい掟。その一方、丹念な暮らしが贅女の到来を迎える村人の心情を、鮮烈な『赫』で描き、緻密な文章で伝えてくれます。

■ 広瀬浩一郎の世界・平成から令和へ
この古い家に残る段差や繊細なつくりは人間に本来必要なものだと思います。盲目の女性達は失った視覚にかえて、触覚・嗅覚・聴覚のすべてを駆使して生きる道を開きました。全盲の文化人類学者である広瀬浩一郎は、それを『サウンドスケール』という概念(測定器具・音階)に載せて、「音に生きる、音で生きる」という言葉でも、「見えない世界からのメッセージ」として伝えてくれます。

■ 多様な背景を秘めて、つながる
高田の贅女さんが雁木のまちに暮らしていた縁から、贅女ミュージアム高田は誕生しました。雁木と町家暮らしの奥深さは、贅女さんのうちに潜在力と相まって、何ら深く人々の心に響き始めているように思います。「ここにきて時がたつのを忘れて」語るお客様言葉や、急な階段を確かめながら「おばあちゃんの家の階段もこみたいたよ」と嬉しそうに語る姿から、思い出が浮かび上がってきます。

昔の町家暮らしは手間のかかることが多く、それゆえに、人は時間をかけて確かめて向き合っていました。合理性を求めた現代と逆の時間が流れています。今の世の中は、心の潤いを取り戻す時間を見逃してきたのかもしれない。贅女という女性達を雁木町家で伝えて早十年、そんなことを感じています。
(渡辺裕子)